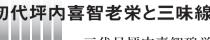
高山の文化を高めた人々 75

三代目坪内喜智琅栄





一本線譜

百五十 うと筆を走ら 本人曰く 部 一歳やな 譜 面 に せて な つ いました。 た 時 は

ちろうえい)、本名坪内吉郎 家の長男として生まれまし の初代家元坪内喜智老栄 大正七年に三福寺町の農 斐太実業学校を卒業し 三味線流派 「坪内 流

初代喜智老栄(昭和41年) 線のことを忘れるこ したが、 その後、 になったそうです の音色と弾く様の虚 に出会い、 農家として生活をす ため満州に出兵しま る中、酒席で三味線 片時も三味 日中戦争の すぐにそ

昭和四

十五年、 を旗揚げ。

民謡会派

声を掛け、

現在も続く高山民

流

初代家

謡連合会を結成し定期的な発

とは無かったと言

指導は師匠の演奏を目で見て

しました。それまでの三味線 元となり名も坪内喜智老栄と

器やジャンルを取り入れ、 客さまを楽しませる催しを数

表会を開催したり、

様々な楽

うです。 れた家族は本当に苦労したそ けに飛んで行きました。 三味線の師匠に手ほどきを受 子入りするなど、 線の祖、 汽車に乗り、 行に出かけることを勝手に決 それをきっかけに三味線の修 した。カネは一つでしたが、 の三味線伴奏として出場しま ど自慢大会があり、町内の方 中三味線を弾いていました。 俵」で三味線を買い しつけ)三味線と大きく重い め、妻と息子に農業を任せ(押 テープレコーダーを背負って ある日、NHKラジオのの 復員後すぐに「米俵 木田林松栄先生に弟 東京の津軽三味 全国の津軽

地域民謡の研鑽が認められ

活動を続け、

平成十五年には

味線を傍らに創作活動や保存 るようになってからも毎日三

味線の伝承に努めました。 茂市など県内各地へ赴き、 連れて汽車で岐阜市や美濃加 として帰郷した後は飛騨で初 林松栄の名を授かり、 四十一年、 くだけでなく、長女の光子を めての津軽三味線の教室を開 几 [十八歳になっ 木田先生から坪内 た昭 指導者 和

が作曲した浪曲を後世に残そ 若い頃に耳にした民謡や自身 す作業のことを言いますが、 になっていない曲を譜面に残 た。譜起こしとは、まだ譜面 起こしに精を出していまし 太棹三味線を抱えて黙々と譜 た資料に埋もれた稽古場で、 毎日山のように積み上げられ 父は九十歳を過ぎても

名を超す時もありました。 が追い風となり、門下が四百 線大会(現芸能大会)を開催 民謡、 しました。 育館にて第一回の坪内流三味 てオリジナル曲を次々と発表 その後、 昭和四十七年には飛騨体 門下を増やしていきまし 全国各地の民謡、 時代も民謡ブー 市内の民謡団体に そし

Ż

るよう、 も自分で効率的に稽古ができ 線譜」を考案し、稽古した後 推奨しました。 きるように譜面に残すことを 流は正確に多くの人が演奏で 津軽三味線 自身も「一本 の中で、 飛騨の 内

男に家元を譲り、

平成三年、

私の父である長 宗家と名乗

きました。

多く開催するなど活躍してい



三味線大会の大合奏(昭和54年)

家族写真(昭和32年頃)

終えるまで、多くの人に支え うになり、家に帰れば「百五十 ではないかと思います。 をこなしていました。 歳」までかかるライフワーク な生活を送ることができたの られながら実に幸せで有意義 二十八年に九十九年の生涯を った山や畑仕事にも携わるよ 晩年はこれまで任せきりだ 平成

ました。 岐阜県文化功労顕彰を受賞